

## 「ソーシャル×散走企画コンテスト 2022・2023」応募報告

### Report of Industry-Academia Collaboration Project “Social×SANSO Planning Contest”

道尾 淳子\*

Junko MICHIO

#### 概要

筆者は、2022 年度及び 2023 年度、未来デザイン学部メディアデザイン学科・人間社会学科の有志学生を募り、課外プロジェクト「ソーシャル×散走企画コンテスト」（株式会社シマノ主催）に参画した。2022 年度は余市町を対象地に選定、学生 10 名（2 チーム）が応募し、内 1 案が大賞を受賞した。2023 年度は栗山町・当別町にて、学生 3 名（1 チーム）が応募し次賞（散走賞）を受賞した。本稿では、企画打合せ、現地フィールドワーク、コンテスト発表、協力先への受賞凱旋発表など一連の教育実践内容の報告を行う。

#### 1. はじめに

「ソーシャル×散走企画コンテスト」とは、自転車を手動手段として地域の魅力やストーリーを楽しむ「散走」というスタイルを提唱する、株式会社シマノ主催の企画コンテストである。社会課題の解決に関心の高い学生を全国から専攻不問で募り、“環境・交流・健康”をテーマに持続可能な地域社会を育む散走企画を募集するもので、2018 年を第 1 回として、毎年実施されている。

筆者は、2022 年度（第 5 回）及び 2023 年度（第 6 回）の二期（図 1）、本学課外プロジェクトにおける教育実践機会として、未来デザイン学部メディアデザイン学科 3 年生及び人間社会学科 3 年生の有志学生を募り、同コンテストに応募、参画した。

北海道におけるサイクルツーリズムなど自転車利用促進に関する幹事団体は、一般社団法人北海道開発技術センター（dec）であるが、各年の具体的な地域社会の選定は、筆者が事前調べを行い、各種協力先を独自に得ている。企画立案プロセスや年度末に関係団体と情報共有を行ない、連携している。

#### 2. コンテスト応募、参画の流れ

同コンテストへの応募は、主催者による学生向けオンライン説明会への参加と、学内にてチーム編成し、エントリー期間（4～7 月下旬）にフォーム申請することから始まる。現地フィールドワークを含む調査・企画・資料作成は学内で期間設定し、随時打合せを行う。散走プランの提出（最終審査 10 分間を想定した企画全てのスライド資料）は 9 月下旬である。一次審査通過の結果が得られれば（10 月下旬）、審査委員会のフィードバックを得て、追加で現地に赴くなど企画の再調整を行い、最終審査用

プランを更新して提出する（12 月中旬）。その後、大阪府堺市所在のシマノ自転車博物館にて口頭発表し、現地審査を受ける。



図 1. 募集フライヤー表面  
（左：2022 年度第 5 回、右：2023 年度第 6 回）

コンテスト概要には審査基準（社会性・企画力・地域調査力のポイント）が示されており、それを読解し、企画の具現化にふまえることが求められる。指導教員側はこれらを適える現地協力体制や見学ルートをコーディネートし、調査フィールドを大学側が能動的に活かす、すなわち、企画に関わる各学生の気付きと表現力向上に重点を置いたフィールド開拓、体験を行うよう留意した。

#### 3. 2022 年度の企画プロセス

2022 年度の具体的な地域社会の選定は、札幌市在住の学生が公共交通機関や自家用車でアクセスしやすい 1 時間圏として、レンタサイクル事業初年度

\* 北海道科学大学未来デザイン学部メディアデザイン学科、北方地域社会研究所



の余市町を企画対象地とした。余市町では余市観光協会所属のサイクルツーリズム推進担当（地域おこし協力隊）の協力を得て、本学の夏季休業中にフィールドワークが実施可能となった。

プロジェクト学生 10 名（メディアデザイン学科 3 年生 9 名、人間社会学科 3 年生 1 名）との初回打合は学内で行なった（22/7/19、図 2）。全員でコンテスト概要を読み合わせ、まずは「散走」を理解すること、企画のチーム編成を行い（結果として A チーム 4 名、B チーム 6 名）、各チームが余市町についてインターネット調査を協働し、最後に、全員で余市町を散走する第一印象を意見し合った。



図 2. 初回打合せの様子

第 2 回（8/19）は、現地フィールドワークを行った（図 3）。レンタサイクルを借り、地域おこし協力隊・田口りえ氏考案中のサイクルツーリズムコースを試走した。観光農園やビンヤードの風景、特産果物使用のリキュール店、カフェやレストラン、有形文化財の博物館等、自転車であれば山と町と海を半日で巡ることができ、そして、一度では全く体験し尽くすことができない町の魅力を確認できた。



図 3. 第 2 回フィールドワークの様子

第 3 回（8/22）は、前回と異なるコースで、余市町にかねてからある「余市幸福運巡り」という開運スタンプラリーを学生視点で巡り、道中の寄り道スポットについても新規に探索した（図 4）。



図 4. 第 3 回フィールドワークの様子

フィールドワーク後（8/24）は、学内でブレインストーミングの時間をとり、思考の拡散を目的に意見交換を行なった（図 5）。散走ターゲットとジャーニーマップ、コンセプト整理のため打合せを重ねた（8/30、9/03）。また、教員としては、単身で再訪し、学生に深い気付きと広い視野を獲得してもらうための現地取材を追加した（8/31）。

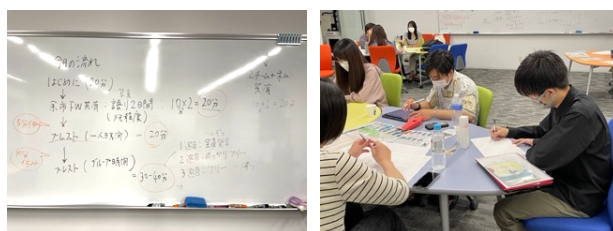


図 5. フィールドワーク後ブレインストーミングの様子

次段階として、企画原案をもとに、余市町にて取材及び企画内容に併せて宿泊を伴う追加のフィールドワークを行なった（9/11、15～16、図 6）。



図 6. 取材活動の様子

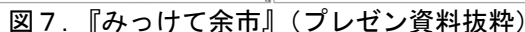
#### 4. 2022 年度の応募成果

同コンテストのプラン提出は 10 分間発表用のスライド（PPT、PDF 形式）という条件のみであり、各チームがフィールドワーク含む実態調査を経た課題抽出と、「散走＝〇〇＋自転車」という公式を設



札幌市

北海道科学大学  
未来デザイン学部  
同部 結  
横戸 友敬  
尾崎 愛生  
武山 将太



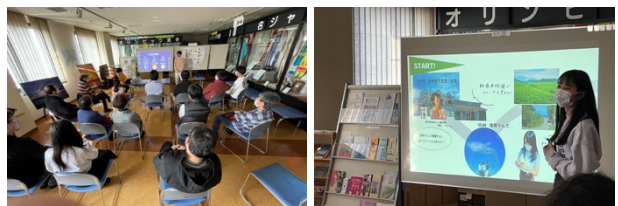
11月26日、Aチーム『みつけて余市』がシマノ自転車博物館（大阪府堺市）での最終審査会で企画プレゼンを行い、大賞を受賞した（図9）。余市観光協会や余市町関係者にもオンラインで最終審査の様子を視聴いただいた。この結果をもとに、本学の2022年度学長賞に上申し、採択され、学生4名が表彰を受けた。



最終審査会後は、同コンペ応募の道内全大学と自治体、自転車利用推進団体の交流機会として「第1回北海道散走ミーティング」(dec 主催)が開催され、本学の2チームとも口頭発表した(23/2/11、図10)。Bチームの提案は、「お酒の町・余市」という既存イメージを前提に、自転車利用に宿泊プランを組み合わせたもので、惜しくも最終審査に進むことはできなかったが、この機会ではネーミング力と企画の波及性に対し高い評価があった。中でも「余市フレンドリーマーク」の提案に注目が集まった。



さらに、本学独自に余市駅隣接のエルプラザにて凱旋報告会を実施した(3/7、図 11)。2チームとも企画内容の実現可能性について町民と意見交換を行うことができた。



Aチームは、地域の人をイラスト表現した「交流



マップ」と、散走客の視点を書き入れ地域に残す「交換マップ」のやりとりが評価された。Bチーム「余市フレンドリーマーク」との統合案を、次年度取り組むことが合意形成された。また、別機会として、本学春のオープンキャンパス（3/23）においても学生による公開プレゼンが行われた。

## 5. 2023 年度の企画プロセス

2023 年度対象地域の選定は、課題テーマを「開拓期の北海道で建設された学校や産業倉庫の利活用資源及び未利用資源」に着眼することとして、札幌から1～2時間圏の当別町及び栗山町の二町を同時に調査し、企画を立てることにした。プロジェクト学生は有志を募り、エントリーを行なった。

当別町では、廃校し未利用資源となった弁華別小学校を主軸にした。一方で町内の教育・産業・鉄道遺産を利活用する個人・民間企業等に連絡をとり、フィールドワークの協力を仰いだ（23/8/21、29、9/6、18、20、図 12）。また、当別町経済部産業振興課や教育施設担当にヒアリングを申し入れた。

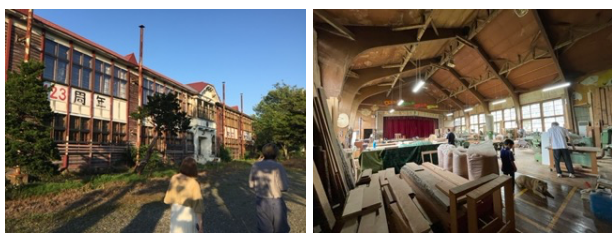


図 12. 当別町フィールドワークの様子

栗山町では、上記廃校と同時期に建設された雨煙別小学校を廃校活用して教育研修・宿泊施設として運営する NPO 法人雨煙別学校や、栗山駅前 JA 倉庫をコミュニティ施設やファブラボとして改修した栗山町ブランド推進課担当者等に協力を仰ぎ、現地フィールドワークを経て（8/24、9/4、11～12、図 13）、散走企画を独自にプランニングした。



図 13. 栗山町フィールドワークの様子

## 6. 2023 年度の応募成果

2023 年度は全国から 17 チーム、総勢 76 名の応募があり、6 チームが最終審査に進んだ。本学チーム

『眠るまちおこし-まちに眠る未来-』（図 14）も一次審査を通過した。その後、二町に留まらず廃校等活用を追加調査して企画を更新した。



図 14. 『眠るまちおこし』（プレゼン資料抜粋）

同企画は、12 月 16 日、シマノ自転車博物館で企画プレゼンを行い、次賞「散走賞」を受賞した（図 15）。この結果をもとに、本学の 2023 年度学長賞に上申し、採択され、学生 3 名が表彰を受けた。

また、「第 2 回北海道散走ミーティング」に参加し、シマノや道内関係者と交流を図った。前年度余市散走企画が契機となったデザイン成果 2 件についても進捗報告を行った（24/03/11、図 16）。

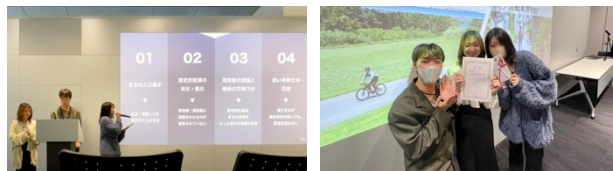


図 15. 最終審査会の様子



図 16. 第 2 回北海道散走ミーティングの様子

## 7. まとめにかえて

「散走」というスタイルをきっかけに、道内の潜在的価値に目を向け、学生の実体験として。現地フィールドワークと多様な他者との交流を重視した PBL 型事業を実践することができた。地域社会の各課題はそう容易に解決できるものではない。価値創造のための教材・資源として、域学のプロセスと成果まとめを行う主旨を、地域・大学・学生の三者があらかじめ共通に理解することによって実りあるものになると考える。今後も継続して挑戦したい。